

- ・ボランティア活動の評価の要点は、参加者数よりも、個々のボランティアがモチベーションを持って取り組んでいけるような工夫がなされているか否かにあると思うので、その意味では、Sでよいと思う。[柏木]
- ・小学生ボランティアの方がクラスごとについてくださり、初めて美術館を訪れる児童も安心して鑑賞し学び楽しむことができた。次年度もサポート体制をご検討いただけるとのこと感謝している。[河原]

学年	平均鑑賞率	平均鑑賞率	平均鑑賞率	平均鑑賞率
小学1年生	88.0%	87.0%	86.0%	85.0%

II 美術に対する理解と親しみを深める

③ 調査研究の成果を活かし、利用者の知的欲求を満たす

〔一次評価〕

達成目標	実施目標
A	A

【達成目標】 企画展の満足度 80%以上※

〔目標設定の理由〕

- ・ 展覧会を企画・実施することは、美術館にとって基本的な活動のひとつであり、中でも、企画展は、波及効果が高く、最も力を注ぐべき事業といえます。こうした認識から、企画展に対する来館者の満足度を、美術館の社会教育機能の高さを示す目安としました。
- ・ 満足度は来館者へのアンケートによって算出しており、同じ方法の調査を継続的に行っています。またその満足度の内訳は「作品」「観覧料」「配置・見やすさ」「解説・順路」「心的充足」を計っていて、その総合数値を出しています。
- ・ 満足度の内訳を見ていくと、「観覧料」「解説・順路」の内の順路については、満足度を上げていくことには限界があり、「作品」「配置・見やすさ」そして解説について改善の余地があります。
- ・ ここ数年の数値の変化の経緯を総合的に判断し、目標を80%以上としました。

※ なお、年度ごとの「企画展満足度」を算出する際には、それぞれの企画展の観覧者数の比率を反映させています。企画展Aの観覧者数をA（人）、企画展Aの満足度をa（%）とするとき、年度ごとの満足度（%）は

$$(A a + B b + C c + D d + E e + F f) / (A + B + C + D + E + F)$$

で表します。

〔一次評価の理由〕

目標の「80%以上」を超える88.0%という数値となりました。

	平成 25 年度	平成 26 年度	平成 27 年度	平成 28 年度
企画展満足度	77.6%	84.6%	87.0%	88.0%

企画展別にみると、「さくらももこの世界展」は、広く人気のあるマンガ家、エッセイストであるさくらももこの原画を含む展覧会でした。「作品」の満足度は93.2%でした。他の項目も概ね高く、総合では92.2%でした。

「自然と美術の標本展」は博物館と連携し、植物や鉱物の標本と、現代作家6組の作品をあわせて展示しました。美術だけでなく自然科学に関心がある方たちが来館しました。標本と美術作品を同じ空間に並べたことも評価され、「作品」と「配置・見やすさ」で高い数値を出しています。

「女性を描く」展はフランスの近代絵画を中心に構成した展覧会でした。最も高い数値は「作品」で84.6%、1,200円と設定した観覧料や、キャプションの文字の見にくさから「解説・順路」は65.1%でした。ただその他のサービスも含め総合では85.0%となりました。

「新宮晋の宇宙船」展は、現代作家の近新作を中心に構成した展示で、満足度は非常に高く92.5%となりました。特に作品については98.6%、すっきりと見やすい展示だったため「配置・見やすさ」も93.9%と全体的に高い評価となりました。

「中村光哉展」では、横須賀ゆかりの友禅作家の展覧会でした。「配置・見やすさ、作品」については約90%と高い数値が出ました。その他の項目も80%を超えて概ね高い満足度を示し、総合的には86.9%となりました。

毎年恒例となっている「児童生徒造形作品展」の観覧者の多くは出品された子どもたちの関係者であり、内容を批判する要素に乏しいことから、他の企画展と満足度を比較するには注意が必要ですが、79.2%と80%を下回りました。「作品」や「配置・見やすさ」には満足をしていますが、「期待どおり」だったことがこの結果になったと考えられます。

また、要素別に満足度を検討すると、「解説・順路」については、改善の余地がある高くない数値となっています。アンケートでも、「キャプションの漢字が読めない」「解説が難しい」などの意見が寄せられているので、より分かりやすい表示をしていくなど、今後の課題とします。

【実施目標】

- ・幅広い興味に対応するようバランスをとりながら、年間6回（児童生徒造形作品展を含む）の企画展を開催する。
- ・所蔵品展・谷内六郎展をそれぞれ年間4回、テーマをもたせた特集を組みながら開催する。
- ・知的好奇心を満たし、美術への理解を深める教育普及事業を企画・実施する。
- ・美術への興味や関心が深まる美術関連の資料（図書、カタログ等）を、図書室で収集・整理・保管・公開する。
- ・資料が探しやすく、快適に利用できる図書室環境を維持する。
- ・主として所蔵作品・資料に関する調査研究を行い、その成果を美術館活動に還元する。

〔目標設定の理由〕

社会教育機関としての美術館は、常に知的好奇心を満足させる事業を行い、また、そのための環境を整えていかななくてはなりません。美術として扱うべき領域はとても広く、

利用者の幅広い興味に応えるためには、所蔵品展以外にもさまざまなテーマを設けた企画展を開催する必要があります。作品の借用が許される期間に限度があることなどを考慮し、1カ月半から2カ月程度を目安とした年間6回の企画展を計画・開催しています。また、コレクションの魅力を紹介するために、所蔵品展および谷内六郎展をそれぞれ年間4回開催しています。

さらに、横須賀美術館では、美術への親しみ、理解を深めるために、講演会やワークショップなど、年間を通じてさまざまな教育普及事業を展開しています。ここでは、広く一般向けの教育普及事業について、評価の対象とします。

これらの事業を企画・実施するための基礎が、調査研究です。範囲は、所蔵作品に関することを中心に、広く美術に関すること、教育普及に関することを含みます。

[一次評価の理由]

28年度の企画展は、アニメ、マンガで広く親しまれている「さくらももこの世界展」海外展、親しみやすいテーマ展、現代作家の個展など多岐にわたっていました。

「さくらももこの世界展」は、「ちびまる子ちゃん」の作者として知られるさくらももこ(1965-)の、表紙絵や絵本の原画約130点を中心に、立体作品やコレクション、音楽とかかわる仕事やエッセイの原稿などを展示し、その作品世界をご覧いただきました。

「自然と美術の標本展」は、標本(植物、鉱物など)をテーマにした展覧会。博物館と連携し、実際の標本と、現代作家6組(江本創、鉱物アソビ、橋本典久、原田要、plaplaX、山本彌)の作品をあわせて展示しました。内容も、また親子向けを対象としたことも夏の開催にあった展示となりました。

「女性を描く」展では、産業化と機械化の発展により、大きく変化したフランスにおける1850年から1939年の絵画の歴史について、「肖像」「画家とモデル」「家庭」「労働」「余暇」「夢の女」というテーマに沿い、女性像を紹介しました。音声ガイドや、近隣事業者とコラボメニューも試みました。

「新宮晋の宇宙船」展は、風や水といった自然エネルギーを受けて、ユニークな動きをみせる屋外彫刻で知られる新宮晋(1937-)が、美術館という屋内空間に挑む個展。海の広場には、世界中を旅した「ウインド・キャラバン」を展示し、好評を博しました。

「中村光哉展」は、横須賀の港の風景を友禅の技法で表現した染色家です。本展では、当館の所蔵作品に、ろう染めによる初期作品を加え、色彩豊かな中村光哉の世界の全貌をご紹介します。展覧会にあわせたきもの特典も好評でした。

所蔵品展では、会期ごとに特集を組み借用作品も加えて、より魅力のある展示となるよう努めました。また次年度が開館10周年となるため、来館者の方によるコレクションの人気投票を第1期から3期にかけて行いました。この結果は29年度の第1期所蔵品展に反映させます。また、こうした「参加」方式のためか、全体の満足度は80.2%と大幅に上昇しました。

第1期では、生誕100年にあわせて「月岡榮貴」を特集しました。

第2期では、横須賀にゆかりのある画家・川田祐子による近・新作の油彩作品を26点、北側展示ギャラリーに展示しました。

第3期では、所蔵品の日本画とあわせて、画材や表具についてわかりやすく説明する特集「日本画っておもしろい」を特集しました。

第4期では、早世した画家・若林砂絵子の油彩、版画作品を特集しました。

谷内六郎館では、所蔵品展の会期と連動して、年4回の展示替えを行っています。28年度は、1期では「雨模様・晴れ模様」、2期では「小さきものを慈しむ」、3期は「おしゃれな、あの子」、4期では「冬物語」というテーマをたてました。また、所蔵品展と同じく29年度の10周年事業として展示に反映するために、第2期から4期にかけて来館者による投票を行いました。

教育普及事業（一般向け）については、一覧すると下表のようになります。

いずれも、参加者と講師、主催者が互いに質の高いコミュニケーションを取り合えるよう、そのつど適正な規模を考えて実施しています。また、講師と美術館スタッフが打合せを重ね、入念な準備を行なっています。結果として、規模は大きくないものの、参加者の満足度の高い事業となっています。

講演会・アーティストトーク

(単位：人)

タイトル	実施日	講師	定員	応募	参加
「自然と美術の標本展」関連トークショー「鉱物趣味クロニクル」	7月9日	鉱物アソビ・フジイキョウコ(「自然と美術の標本展」出品作家)	70	—	24
「自然と美術の標本展」関連トークショー「幻獣採集探検譚」	8月11日	江本創(「自然と美術の標本展」出品作家)	70	—	78
「女性を描く」展関連講演会「近代都市パリに生きた女性たち」	10月1日	坂上桂子(早稲田大学文学学術院教授)	70	—	20
「新宮晋展」関連アーティストトーク「この星に生まれて」	11月3日	新宮晋(出品作家)	120	—	120
中村光哉展関連アート&アフタヌーンティー	3月4日	当館学芸員	25	—	24
谷内六郎館関連講演会「これ、うちにあった！谷内六郎×なつかしの道具で振り返る‘昭和’」	10月23日	瀬川渉(横須賀市自然・人文博物館学芸員)、当館学芸員	20	—	7
アーティストトーク	9月4日	川田祐子(第2期所蔵品展出品作家)	—	—	70
学芸員によるギャラリートーク(各企画展)	4月23日 7月23日 9月24日 10月15日 11月19日 12月15日 3月18日	当館学芸員	—	—	112 *合計値

展覧会関連ワークショップ

(単位:人)

タイトル	実施日	講師	定員	応募	参加
谷内六郎館関連「ろうけつ染で絵を描こう」	10月2日	すずきあき(染色家)	16	17	15
中村光哉展関連「見て・聞いて・染めて知る‘友禅’」	2月25日	平林芳子(友禅作家)	20	29	18

オトナ・ワークショップ

(単位:人)

タイトル	実施日	講師	定員	応募	参加
「アートなカップをつくろう」	9月18日 (2回)	白倉えみ(陶芸家)	20	61	17
「シルクスクリーンのミニノートをつくろう」	12月3日 (2回)	NEWPOSITIONS(シルクスクリーンペーパー作家)	16	18	16

映画上映会

(単位:人)

タイトル	実施日	講師	定員	応募	参加
冬のシネマパーティー 『エルミタージュ幻想』	2月4日	キノ・イグルー(移動映画館)	30	68	30
	2月5日		30	46	29

教育委員会他課との連携

(単位:人)

タイトル	実施日	講師	定員	応募	参加
第40回横須賀市市民大学講座「フランス絵画のなかの女たち『女性を描く』展の背景」(横須賀市生涯学習財団との共催。ウエルシティ市民プラザ)	10月26日	浅間哲平(静岡県立大学講師)、当館学芸員	80	—	90
第38回美術館めぐり「横須賀美術館『女性を描く』展」(横須賀市生涯学習財団との共催。横須賀美術館)	10月11日	当館学芸員	40	—	40

平成28年度の講演会は、7回実施したうちの4回が出品作家によるトークとなりました。特に、現代美術の場合、作家自身のトークは、作品への理解を深めるという面でも、また、作家のファン層の来館を促すという意味でも、有効だったと考えます。

展覧会関連のワークショップは、展示作品の技法を追体験する内容で2回開催しました。また、当館の特徴的な事業の一つである「オトナ・ワークショップ」では、注目度の高いジャンルをうまくワークショップに取り入れることができました。

映画上映会は、「シネマパーティー」として恒例化しているイベントで、例年通り、安定した参加者数を得ています。今回から上映場所をエントランスホールに移し、より大きなスクリーンで見られると好評でした。

また、市民大学講座との連携による教育普及事業を2件実施し、合わせて130名の参加を得ることができました。市民大学講座との連携は、平成24年度より実施しており、今後も継続していくことが望まれます。

図書室に関しては、定期購読雑誌や作品集をはじめ、美術史・デザイン・建築・写真など幅広い分野の美術図書と、自館で開催する展覧会に関連する資料、子ども向けの美術入門書やアーティストによる絵本などを収集しています。配架の工夫や室内案内表示により、利用しやすい環境づくりに努めているほか、展示室内にも案内用のファイルを置き、利用の拡大につとめています。

〔評価委員会による二次評価及びコメント〕

	一次評価	二次評価	評価委員会コメント
達成目標	A	A	年々企画展の満足度が向上しており、安定感もある。キャプション文字の見にくさ等、問題が改善されれば満足度は大幅にアップすると思われる。

- ・年々企画展の満足度が向上しており、安定感もある。[菊池]
- ・来館者総数の1%強の母数に基づく数値結果ではあるが、出品作品に対する満足度もすべて高い数値を示しており、「利用者の知的欲求」は高水準で満たされていると評価する。[柏木]
- ・キャプション文字の見にくさや解説などに問題があり、改善の余地があると判断され改善が可能ならば、早急に実施すれば満足度は大幅にアップすると思う。その際には、今後目標設定を上げるべきと考える。[草川]

	一次評価	二次評価	評価委員会コメント
実施目標	A	A	大人・子ども・親子など様々な層が楽しめる企画展であり、作家本人の講演会やトークは鑑賞の魅力を増す効果があり、来館者の満足につながった。

- ・満足度に表示されているように、平均したばらつきのない評価は、企画内容が支持されたものと思う。[菊池]
- ・展覧会の内容もバランスが取れており、関連事業にもしっかり取り組んでいると思う。数値目標未達の展覧会については、原因の分析が必要。[柏木]
- ・大人・子ども・親子など様々な層が楽しめる企画展であり、作家本人の講演会やトークは鑑賞の魅力を増す効果があり、来館者の満足につながったと思う。[河原]

④ 学校と連携し、子どもたちへの美術館教育を推進する

〔一次評価〕

達成目標	実施目標
A	A

【達成目標】中学生以下の年間観覧者数 22,000 人

〔目標設定の理由〕

子どもたちが美術館に親しみを持ち、利用しやすくするためのさまざまな取り組みをしていますが、その成否は、実際の観覧者数に反映されるはずです。

従来、横須賀美術館では、一定の質を保った美術展を年間通してバランスよく行うこととしています。平成27年度については、夏季に、世代を越えた支持層をもつ TV シリーズ「ウルトラマン」をテーマとして、「ウルトラマン創世紀」展を開催しました。また、秋には、絵本作家として知られる長新太氏の回顧展を行いました。

今年度も、世代を問わず親しみのもてるテーマを取り上げるとともに、美術館でなければできない子ども向けの事業を行うよう心がけることとします。

一方で、市全体の14歳以下の人口が減少していることや、子ども向け事業の対象からははずれる中学生の観覧者数が横ばいであることなど、中学生以下の観覧者数が容易には増加しにくい条件も見られることを考慮し、平成28年度の目標は、これまで通り22,000人としました。

〔一次評価の理由〕

28年度の中学生以下の年間観覧者数は22,208人となり、目標を達成しました。

中学生以下の観覧者数 (単位：人)

	平成 25 年度	平成 26 年度	平成 27 年度	平成 28 年度
幼児	5,358	9,216	7,202	5,668
小学生	11,819	12,851	12,639	12,414
中学生	4,119	4,003	4,332	4,126
計	21,296	26,070	24,173	22,208

家族連れが訪れやすい行楽シーズンに、若年層向けの事業を実施するという年間の事業計画が、目標達成につながっています。

平成28年度は、夏休み期間に、自然科学分野と現代美術という二つのジャンルを融合させた「自然と美術の標本展」を開催したことが、家族層の集客に効果的に作用しました。8月の中学生以下の観覧者は、この年代の年間の観覧者数の1/4に当たる、5,610人となっています。

また、同展においては、市立の小中学校を通して全児童生徒に子供向けのチラシを配布しました。展覧会情報を、学校からの配布物という信頼性の高い手法で周知することには、一定の効果があると考えられます。ただし、平成28年度は、例年3つの展覧会で実施している、この全児童生徒向けチラシが、予算の都合で2回となりました。中学生以下の観覧者数に大きな伸びが見られなかったことの原因の一つと考えられます。

展覧会以外の事業としては、小・中学生の造形活動を支援する目的で、映画上映会を含めた10回の子ども向けワークショップを実施し、合計で587人（保護者を含む）の参加を得ました。

鑑賞の面では、小学生美術鑑賞会（全市立小学校6年生約3,500人が参加）、中学生対象の鑑賞教室（保護者を含む196人が参加）、未就学児から小学校低学年を対象とした親子向け展覧会ツアー（4回実施、17組35人が参加）、保育運営課との連携による市立保育園10園を対象とした鑑賞プログラム（約300人が参加）など、年齢別にさまざまな鑑賞活動支援事業を行なっています。いずれも、継続的に実施しているものですが、教員や保育士との連携、他館との情報共有により、つねに発展的な内容となるよう努めています。

【実施目標】

- ・学校における造形教育の発表の場として、児童生徒造形作品展を実施する。
- ・学校および関係機関と緊密に連携し、子どもたちにとって親しみやすい鑑賞の場をつくる。
- ・子どもたちとのコミュニケーションを通じて、美術の意味や価値、美術館の役割などに気づき、考え、楽しみながら学ぶ機会を提供する。
- ・鑑賞と表現の両方を結びつけたプログラムを実施する。
- ・小学生美術鑑賞会を充実させるため学校との連携を強化する。鑑賞会と連動した教材「アートカード」の一層の活用促進を教員と協力しながら行う。

〔目標設定の理由〕

美術教育は表現と鑑賞との両輪によってなりたつものですが、多くの学校教育現場では鑑賞の機会に乏しく、表現としての造形教育に偏りがちでした。

近年の学習指導要領では、小・中学校における鑑賞教育がより重視されるようになってきています。平成23年度から実施された小学校の新学習指導要領では、鑑賞教育のために地域の美術館を利用することに加え、学校と美術館との連携を図ることが明示されています。美術館には、先生との情報共有を密にし、学校からのニーズに応えることが求められています。

学校教育ではできない、美術館だからこそできることは何かをじゅうぶん意識しながら、鑑賞教室やワークショップ、作家との連携等充実したプログラムを企画、提供することによって、子どもたちが美術に親しみをもつ機会の拡充につとめていきたいと考えています。

【一次評価の理由】

- ・平成20年度から、市内の子どもたちの作品を一堂に展示する「児童生徒造形作品展」の会場となっています。学校・幼稚園と緊密に連携しながら運営にあたっています。
- ・平成19年度から実施している小学生美術鑑賞会の対応には、学芸員と専門のボランティアがあたり、ワークシートなどを利用して、鑑賞の楽しさを知ってもらえるようつとめています。受け入れ側が経験を積むことによって、内容も充実度を増しています。
- ・平成28年度の小学生美術鑑賞会に際して、アートカードによる事前授業の実施状況等を各校に調査したところ、4割の学校が実施していると回答しました。事前授業によって、あらかじめ作品のイメージが伝わっていると、作品に対する児童の反応もよくなるのが分かっており、今後も活用促進を図っていくことが重要です。
- ・小学生美術鑑賞会以外で来館する市外あるいは私立の小・中学校に対しても、要望に応じて、美術館でのマナー解説やワークシートの提供を行いました。
- ・夏休みの時期に合わせ、中学生のための美術鑑賞教室を実施しました。鑑賞ガイドの内容が、参加する中学生のニーズに合うようつとめました。
- ・子どもを対象とした教育普及事業に積極的に取り組んでいます。ワークショップなどの造形活動のほか、野外映画会や、親子向けのツアーなど、さまざまなかたちで美術を楽しむ機会を設けています。
- ・「自然と美術の標本展」では、走水小学校で出前ワークショップを行い、また、横須賀市自然・人文博物館の事業とも連携したワークショップを実施しました。
- ・キャリア教育の面で、市立中学校の職業体験に協力しています。平成28年度は13校22人を受け入れました。
- ・鑑賞支援活動については、対象となる年齢層の幅を広げています。親子向けツアーのほか、平成24年度から市の保育運営課と連携し、市立保育園全10園に対し、出前授業と来館時の鑑賞プログラムを実施しています。
- ・美術館が主体となって行なう事業だけでなく、先生が中心となり学校で行なうことのできる鑑賞教育について、研究と実践を重ねています。平成25年度に開発した鑑賞教材「横須賀美術館アートカード」（文化庁補助事業）は、市外からも注目され、平成28年度は10件の貸し出しと、2回の市外教員向け研修会を実施しました。市内においては、教員が独自のアートカードを制作して行う新しい授業の取り組みが2件あり、美術館から資料の提供を行いました。

【次年度への課題】

- ・平成25年度より継続して行なってきた「地域とはぐくむ子どもための鑑賞教育基盤整備事業」は、当初予定通り、27年度末をもって、文化庁からの助成が終了しました。今後も、学校現場での活用状況を把握し、必要に応じてさらなる活用促進を呼びかけていきます。また、学校で行なわれる鑑賞教育と連動した、的確な来館プログラムについて、研究を進め、ワークシート等に反映させます。